

くもんのノンフィクション*愛のシリーズ

たんぽぽの花は野に山に

子どもにゆめをはこんだ^{げきだん}「劇団たんぽぽ」と^{きゅうりょうこ}小百合葉子の40年

浜田けい子・作 木村仲久/北原教隆・写真 由谷敏明・絵



くもんのノンフィクション*愛のシリーズ⑥

たんぽぽの花は野に山に

一九八五年六月十一日 初版第一刷発行

作家

はまた
浜田けい子

写真

きむらなかひさ きたはらのりたか
木村仲久・北原教隆

画家

ゆたにとしあき
由谷敏明

発行人 武市 功

編集人 中城正堯

発行所 くもん出版(公文教育研究センター出版部)

東京都千代田区五番町三十一 五番町グラントビル

郵便番号 一〇二一

電話番号 (〇三)二三四四〇〇一

印刷所 共同印刷株式会社

NDC916・くもん出版 184P・22cm・1985年

©1985 Keiko Hamada

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

ISBN4-87576-217-8

Printed in Japan

くもんのノンフィクション*愛のシリーズ⑥

たんぽぽの花は 野に山に

子どもにゆめをはこんだ「劇団たんぽぽ」^{げきだん}と小百合^{きりようこ}葉子の40年

浜田けい子・作 木村仲久／北原教隆・写真 由谷敏明・絵





たんぽぽの花は野に山に——もくじ

お母 ^{かあ} さんのところへ	6
日本一の不良 ^{ふりよう} になります	16
たんぽぽの花、あなたはつよいね	26
はじめての舞台 ^{ぶたい}	38
うれっこ女優 ^{じょゆう} の葉子 ^{ようこ}	52
「劇団たんぽぽ」が生まれた	68



リュックサック劇団 ^{げきだん}	88
ふりかかるさいなん.....	104
たんぽぽの家 ^{いえ} がもえた！.....	118
沖縄 ^{おきなわ} にとんだたんぽぽ.....	138
ふたつのお地藏 ^{じぞう} さん.....	158
たくましくさいた花——たんぽぽ.....	170

浜田けい子(作)はまだ けいこ

大阪市に生まれる。明治大学文学部演劇学科卒。主な著書に、『みなしご弥八(筑摩書房)、『おれの名はスパイ』(三省堂)、『女王ヒミコ』(さくら書房)、『黄金のあざみ』(学校図書)、『テレパシードロップをどうぞ』(岩崎書店)、『コスモス塾日本3』(金の星社)、『十字軍のたどった道』(ぎょうせい)など。他に雑誌などにも執筆。日本児童文芸家協会、日本児童文学者協会、ノンフィクション児童文学の会などの会員。

木村仲久(写真)きむら なかひさ

一九三八年静岡県生まれ。日本大学卒業。主な著書に、『花と海の里』(くもん出版)などがある。一科会会友、全日本写真連盟会員、集団影法師主宰。

北原教隆(写真)きたはら のりたか

一九二七年生まれ。フリーランスの写真家のほか、日本写真学園の講師を勤める。日本写真家協会会員。

由谷敏明(絵)ゆたに としあき

一九二三年鳥取市生まれ。新聞、雑誌などの挿絵、洋画で活躍中。白日会所属。

写真・取材協力

安部久夫 中西市蔵

劇団たんぽぽ 早稲田大学演劇博物館 西遠女子学園 静岡県天竜市上阿多古小学校 ボンカラー・フォトエイジェンシー

たんぽぽの花は野に山に

子どもにゆめをはこんだ「劇団たんぽぽ」と
小百合子の四十年

浜田けい子・作 木村仲久／北原教隆・写真 由谷敏明・絵

お母^{かあ}さんのところへ



小百合^{さゆり}葉子^{ようこ}は、少女^{しょうじょ}時代^{じだい}にみえとよばれていました。

*

お母^{かあ}さんが、いなくなってしまった家^{いえ}のなかは、どこか、がらんとして、大きなあながあいたようでした。お父^{とう}さんが病^び氣^{ようき}でしぬとまもなく、お母^{かあ}さんは、じぶんの生まれた村へかえってしまったのです。

「おじさん。あたし、お母^{かあ}さんのところへいきたい。すぐにもどつてくるから。」
みえは、いいました。

お父^{ちち}さんやお母^{かあ}さんがいなくても、家の人たちは、みんな、だいじにかわいがつてくれました。でも、やっぱり、みえはさびしかったのです。みえは、まだ六歳^{さい}でした。明治^{めいじ}四十（一九〇七）年ごろのことです。

「ああ、いっておいで。だが、ちゃんと、ご先祖さまと、ごいっしょにだぞ。」

おじさんは、仏壇ぶつだんのなかにおまつりしてある位いはいのほうを見ました。

それは、ふるいふるい先祖から、みえのお父とうさんの太平たへいにいたるまで、十四代だいもつづいてきた山下家やましたけの、たいせつな位いはいでした。

「はい。山下家のあととりむすめですもの。あたし。」

みえは、かわいい目をぱっちりさせ、はきはきとこたえました。

おじさんは、小さなめいの、なまいきな口ぶりに、目をほそめて、

「おまえは、かしこい子じゃ。女の子とはいっても、たのもし。よしよし。ゆつくりとお母かあさんのところで、あそんでおいで。」

と、頭あたまをなでました。

いよいよ、お母さんのいる川名村かわなへはじめて出かける朝あさ、みえは、山下家の先祖の位いはいを、背中せなかにせおわされました。家のあとをつぐものは、いつも、先祖の霊れいをおまつりするつとめがあるからです。

山のむこうにある川名村は、みえのすんでいる滝沢たきざわというところから四キロほどはなれていました。どちらも、静岡県しずおかけんの浜松市はままつしから北きたのほうへのぼっていった



山あいの村でした。山をこえていく道には、
乗り物も、なにもありません。

小さなみえは、とものものに、手をひかれ
て、石ころ道を、せつせとあるいていきまし
た。

「みえおじようさま、ごらんさい。あそこ
が、わたしどもがくらしている滝沢のさとで
ございますよ。ほら、大きなやねが見えてい
ましょう。おじようさまのおやしきだ。」

とおぎかつていく山ざとを、ふりかえりな
がら、とものものがありました。滝沢は、み
えの先祖がきりひらいたところです。

「あたし、すぐにかえってこなければ……。
だって、お父さんにかわって、あの家をまも
っていくの、あたしの役目なんだから。」

みえは、きゅつと、さくらんぼのような口をひきしめました。

ひぐらしがないています。そして、山道^{やまみち}は、うねうねと、緑^{みどり}くしげった木の下につづいていました。

ようやくたどりついた川名^{かわな}村も、山にかこまれた、しずかな村でした。

お母^{かあ}さんの実家^{じっか}は殿柿^{とのがき}という姓^{せい}で、家^{いえ}のかまえも山下^{やました}家にまけないほど大きくて、りっぱなやしきです。そして、とてもにぎやかでした。なにしろ、村いちばんの大きな店^{みせ}でした。

店には村の人のくらしにひつような品^{しな}ものは、なんでもそろえてありました。

「この店でうっていないのは、しんだ人を入れるかんおけだけよ。」

あんまり、いろんなものが、店いっぱいにならんでいるので、びっくりして、目をぱちぱちさせているみえに、お母さんは、ほほえんでいます。

お母さんの家へいく道をおぼえてからというもの、みえは、よく、川名のお母さんのところへ、あそびにいきました。

かいものにくる客^{きやく}でにぎわう川名の店は、いつも、人^{ひと}の声^{こゑ}がしていました。それにくらべて、滝沢^{たきざわ}の家は、しーんと、しずまりかえっています。

でも、みえは、どちらの家もすきでした。だれからも、とてもかわいがられて
いるからです。

小学校は、お母さんのところから、川名小学校へかようことになりました。
でも、休みの日には滝沢へも出かけました。

「おや、また、ひろつてきたのかね。」

「だって、かわいそうだもの。」

みえが、道みち、だいてきた子犬を見て、滝沢のおじさんが、ちよつと、まゆ
をよせました。くるたびになんびきとなく、道ばたから、のら犬やねこをひろつ
てくるからです。

それでも、どちらの家の人たちも、いやな顔をしないで、だれかにすてられた
動物のめんどうを、みえといっしょによくみてくれました。

ある日のことです。午後も早いうちに、ほんとにぷんぷんしながら、みえは、
学校からかえってきました。

お母さんは、庭にいました。そこには、ぶどうだながあつて、むらさき色の実
がたくさん、なっていました。

「ねえ、お母さん^{かあ}。ほんとに、いやになってしまったわ。きょう、学校で先生が、みんなに、『大きくなったら、なにになりたいか。』って、たずねたの。」
みえは、いいました。大きな目に、なみだがたまっています。



TYUTANI

「みえは、なんと、こたえたの。」

お母^{かあ}さんは、ぶどうの実を見あげながらたずねました。

「あたし、『けがしたり、年をとったり、病^{びよう}氣になったりした犬やねこに病^{びよう}院をつくって、その院^{いん}長先生になります。』って、こたえたの。そしたら、みんなが、大わらいしたわ。だから、あんまり、腹^{はら}が立って……。でもあたし、まじめにかんがえているのよ。」

「それで、学校、早^はびけして、かえってきたのね。しょうがない人ね。短^{たん}氣はいけないわ。あなたは、あたしににて、氣がつすぎるのよ。みえ。」

お母さんは、ぶどうの実を、ひとふさきりとると、みえの手にわたしました。

「まあ、宝^{ほう}石^{せき}みたい！」

みえは、おもわず、てのひらのなかのぶどうのふさを、そつと、つつみました。「みえのこたえが、きつと、あんまりとつびようしもなかったから、お友^{とも}だちがわらったのよ。みえの氣もちが、みんなには、よくわからなかったんだわ。」

「どうしてかしら。あたしはとても、かわいそうなんだけどな。ひろってきた犬やねこだって、家^{いえ}でやっと、きれいに身^みづくろいしたり、首^{くび}輪^わをつけたりしたら、

⇒10歳のころのみえ。当時は、着物をきている子がほとんどで、洋服はめずらしかった。

⇒大正3年、川名村の川名小学校を卒業するときのみえ。みえは、まえから2列め、右から7人めにならんでいる。



いつもどこかへ、もらわれていくでしょ。あたし、かなしくてしかたないの。みんな、ここにおいて、せわをしたい。」

「そうね。そんなふうにできたらね。」

お母^{かあ}さんも、顔^{かお}をくもらせました。

六つの年にお父^{とう}さんをなくしてしまつたひとりつこのみえが、かわいそうでならなかつたのです。

「みえ、さびしいのね。」

お母さんはつぶやきました。

お母さんといっしよに、川名^{かわな}村にすむようになつて、六年がたちました。

みえは、また、お母さんとわかれることになりました。小学校を卒業^{そつぎよう}してい

よいよ、町の女学校へ入学することになつたからです。

それは、浜松^{はままつ}市にある西遠^{せいえん}女子学園^{がくえん}という学校でした。

浜松市は、滝沢^{たきざわ}から川名^{かわな}からも、それほどおいところではありません。

けれども、もちろん、家^{いえ}からかよえるほどかいわけでもないのです。それで、

みえは、学園^{がくえん}の寄宿舎^{きしゆくしゃ}へ入ることになっていました。

お母^{かあ}さんは、浜松^{はままつ}へみえがもっていく、着物^{きもの}をぬいながら、心配^{しんぱい}そうに、ためいきをついています。

「これから、おまえが毎日^{まいにち}すむことになる、寄宿舎^{きしゅくしや}というところは、なんでも、きそくが、たいへんきびしいそうだよ。ちゃんと、まもれるかしらね。わがままなおまえに。」

「だいじょうぶよ。お母さん。ほかの人にできることなら、あたしにだってやれるわ。」

お母さんの心配をよそに、これからはじまる、あたらしい毎日のことをおもって、みえは、もう、わくわくしていました。